

カルチャー・ショック

外国人のみた日本



Khin Maung Soe
出身地：ミャンマー・シャン州
所属：畜産漁業省漁業部
日本滞在：2007年4月～10月

日本での最初の二カ月間

キンマウンソー

来日前に私は日本語を学ぶよう指示を受けていたが、日本に到着した時点で、挨拶の際に役に立つ一〇単語程度しか覚えていなかった。日本に到着してまもなく、行き先表示板や掲示物全てが日本語表記であることに気づいた。私のアパートに備え付けのビデオプレーヤーを含め、電化製品の取扱説明書も日本語で書かれていたため、私にとっては最悪な状況であった。

私のカウンターパートによると、(その彼女から説明を受けた)三つのボタンを押せば、洗濯機を容易に使用できるとのことだった。洗濯機の使用 방법이簡単であることは、私にとっては良かった。現代的な洗濯機であれば、洗濯、脱水、と機械が全自動で衣類を洗濯してくれる。使用マニュアルを何度か確認した後(実際は描いてある絵を見ただけで、読むことはできなかった)、この全自動洗濯機を思い切つて作動させてみることにした。

ボタンを押して、洗濯機を動かしてみた。そして六〇分位後に、洗濯が終了したことを知らせるアラームが鳴った。だが、洗濯機のふたを開けて中をのぞくと、衣類が洗濯されたままの状態ではなく、乾燥していた。衣類が濡れた状態で洗濯が終了するのではなく、衣類が乾燥した状態にまで洗濯

機が仕上げてくれることを私は知った。

ところで、私のカウンターパートとその旦那さんに手伝っていただいたおかげで、台所用品をスムーズに購入することができた。スーパーマーケットに設置されている棚やトレイから、商品を選ぶことはとても楽しく感じられた。ちよつと不都合に思つたのは、支出額を私の国で使用している通貨の価値に計算し直すときであった。

二週間後、買い物をするために今度は一人でスーパーマーケットに行つてみた。料理法の説明書きや、私の購買意欲をそそるような魅力的なパックに入っている商品を見つけた。全商品に日本語が記載されていたので、卵、鶏肉、豚肉、野菜を買うこと以外に、私には選択の余地は残されていなかった。

透明なパッケージに入った鶏肉や豚肉には、価格を表示しているラベルがパッケージの上に貼られていた。鶏肉は二三五円、豚肉は一五〇円、とそのラベルには示されていたため、大きな鶏肉のパックを二つ、豚肉を二パック選んだ。日本での滞在中、米よりも肉や野菜類を多く食べられるかもしれない、と思つたほどだ。

しかし、レジカウンターで会計を済ませた後、私の夢は無惨にも打ち砕かれてしま

つた。私がチェックした前述の価格とは、一〇〇グラムあたりのものだったのだ。六〇〇グラムほどの鶏肉と七五〇グラムほどの豚肉を選んでしたことにより、二二〇〇円ほど支払わざるを得なかった。なんということか！

犬用の缶詰を間違つて購入してしまった海外客員研究員がいた、との話を耳にしたことがある。幼児の衣類を購入する際に、(犬や猫用といった)ペット用とはいえない立派でかわいらしい衣類を間違つて購入してしまうことは、容易に想像できる。カルフォルニアのあたりを散策したり、ウインドーショッピングをした際に、私もこのような誤解をしてしまつたところであった。

以上のようなカルチャー・ショックを私は体験したが、日本の文明も同時に実感できた。日本では、経済発展と人々との間に調和が保たれていた。勤務開始時間に遅れないよう、せかせかしている現代人を目にした。その一方で、幼児を背負っている母親、特別な行事で着物を着ている婦人、クラシックのスター歌手に拍手喝采する聴衆の姿は、現代的な日本が近代化による恩恵を受けつつも、伝統や文化をも大切にしていることを反映しているといえる。

(前海外客員研究員／訳＝相山貴史)